令和7年度　アーツ前橋事業評価調書（展覧会用）

資料　2-(1)

事業名	向井山朋子　Act of Fire					
担当者	宮本武典、東美沙季、根岸隆（事務）			実施方式	01自主企画・単独方式	

印刷物等	ポスター（B2）	チラシ（A4）	館内マップ	セルフガイド	リーフレット	図録
	800 部	40,000 部			9,000 部	

収入／支出	収入（A）	支出（B）	収支比率（A）／（B）	入館者一人当たりコスト	収入内訳		
					観覧料	助成金	他
予算	5,000,000 円	13,963,760 円	35.8%	2,793 円	2,000,000 円	3,000,000 円	
決算見込	5,310,600 円	13,907,515 円	38.2%	2,686 円	2,310,600 円	3,000,000 円	
差額	310,600 円	-56,245 円	2.4%	-	310,600 円	0 円	0 円
予算/決算	106.2%	99.6%	106.6%	59.1%	116%	100%	

・広報戦略 ・新たな試み	限られた予算で、海外在住アーティストの大規模個展を実現させるため、本展は他機関との連携で展覧会のメイン作品となる映像インスタレーション《ここから》を制作した。向井山氏の財団（マルタス）が主体となり、同氏が拠点とするオランダの政府助成金とアートカウンシル東京のサポートにより、2025年度の映像撮影を実施し、その関連企画として5月20日に東京オペラシティリサイタルホールでのリサイタルを開催した。前橋での本編（展覧会）では、当館での新作発表に加え、高崎で同じくピアノリサイタルを実施し、クラシック音楽ファンの取り込みを行なった。なお、本作品は来年度に天王洲のWHAT MUSEUMに巡回する。
広報実績［新規掲載や効果大の媒体など特別な案件］	BT美術手帖、TOKYO ART BEATなどのアートメディアに展覧会リポートが掲載された他、朝日新聞の社会面に展評が掲出、また、世界29地域で発行されている女性誌『Harper's BAZZR』でも本展と連携する紙面企画が組まれた。

入場者数(参考数値) 上段：人数（人） 下段：割合（%） ※色付きは有料	一般	学生	65才以上	団体	高校生以下	障害者	招待券	割引等	他	イベント	合計（人）	日平均（人）
	1,977	266	123	12	324	205	382	0	2,008	263	5,178	104
	38.2%	5.1%	2.4%	0.2%	6.3%	4.0%	7.4%	0.0%	38.8%	5.1%		

一般指標	指標	目標値	達成値	達成率	特記事項
	入場・参加者数	5000	5,178	103.6%	
	展覧会満足度	80%	84.1%	+4.1pt	アンケートの「満足」、「やや満足」割合（無回答を除く）

観覧者層のターゲット	現代美術、現代音楽、ファッション、クラシック音楽に関心のある観客者層
成果	本展はグローバルに活躍するアーティストを起用し、アート、音楽、ファッション、映像、フェミズムなど多様なテーマやメディアを複合的に構成する実験的な展覧会であり、美術館や劇場での鑑賞体験が豊富なアートファンや専門家の評価を得ることができた。
ねらい1	東日本大震災から15年の節目に「喪失/記憶/再生」をテーマにした新作を国際的に活躍するアーティストと制作・発信する
成果	3.11から15年という節目を、会期中の3月11日に迎えることを踏まえ、2011年3月から向井山氏が世界規模で継続してきた2台の「被災ピアノ」を組み込んだプロジェクトを招聘した。3.11という社会的事象をモチーフにしながら、時の経過、記憶の風化、喪失からの再生、音楽の（記憶の）喚起力など、前橋のローカル・リサーチに留まらない、根源的なテーマを表現することができた。
ねらい2	「アーツ」を体現する企画として、視覚偏重の美術鑑賞に一石を投じる、音・音楽を軸としたミュージアム体験を創出する
成果	ピアニストとして国際的に活躍する向井山氏を起用することで、県内外の音楽及び音響の専門家と協業を行い、当館内に大規模な音のインスタレーションを実装できた。また、音楽ホール等と連携するリサイタルを実施し、美術のカテゴリーに留まらない、文化芸術の横断的な企画となった。
ねらい3	アーツ前橋の空間的特徴を活かし、当館でしかできないサイトスペシフィックな展示及び鑑賞体験を創造する
成果	会期中に震災遺物のグランドピアノを当館のメインギャラリー1-2の吹き抜け空間に設置し、これを軸に回廊状の他4つのギャラリーを構成した。空間を横断しシンクロする音・映像・映像の精緻なプログラミングによって、美術館内で劇場的なアート体験空間を創出できた。また、全館を使って1つのインスタレーションを制作・発表するという試みも従来の展覧会のあり方を拡張する試みとなった。
課題・改善点	アーティストが見込んでいたオランダ政府からの助成金を、市の会計の仕組み上、当館内での展示経費を増額することができなかったため、当初の展示プランの70%程度しか実現できなかった。同様の理由で図録も作成できていない（来年の天王洲での再編巡回時に図録を作成。アーツでの記録写真も掲出される）。また、アーティストの意向により、展示空間内の解説テキスト等の掲出を控え、ハンドアウトによる背景説明に留めたが、結果的に観客には伝わりにくさが残り、満足できる来場者数には至らなかった。実験的なプログラムにはなったものの、各方面へのアプローチには課題が残った。本展の経験を踏まえ、今後国際水準のプロジェクトを招聘・組成する際の外部予算の組み込みと、地域住民対象のコミュニケーションデザインについては改善と仕組み化をはかっていきたい。